山と博物館

第28巻　第1号　　1983年1月25日　　大町山岳博物館

常念乗越より槍ケ岳　　撮影　古幡和敬

石彫公園えの夢

諏訪市にはすばらしい石彫公園が造られている。これは世界各国の名彫刻家を集め、一九七八年諏訪湖国際彫刻シンポジュウムと名打って、諏訪市が前から考えていた文化公園造りの一環として実現されたものである。

しかも、この公園は諏訪湖の汚水に端を発しているというのも面白い。湖底をしゅんせつした汚泥による埋立て地に文化公園を造ることを考えていた矢先、たま〳〵本県出身で東京芸大彫刻科出身の横沢英一先生が「この諏訪湖を大事な文化財として育てあげるために、湖周辺に広場を設け地域の中に眠っている良質の岩石を用いて石彫公園を造ったら」と熱心に説得した。それに対し市も大きく動かされ、横沢先生を中心として世界各国の彫刻家を諏訪に招き、九、十の二ケ月を要し、諏訪周辺の景色、歴史と現況、都市計画などを基調に立案討議し、製作者全員が不自由な共同生活をし、燃えるような創造への情熱を傾注され、現在の石彫公園ができあがったと聞いている。これらの原石は霧ケ峰から掘り出され、大きなものは三十トンもあり、数にしても三十個以上の石を用いて製作されている。そしてそれぞれの彫刻は築山や柔らかい芝の間に点在し、美しい芸術の結晶として配置され、自然に逆らうことなく落ついたふんいきを作っている。この公園で観光客は足を止め市民は憩の場としてここを訪れ、子供たちはこれらの作品に直接手をふれ、上部の平な上に乗って喜々としてとびはね、また、小さな彫刻にまたがって楽しむ姿がみられる。山岳都市大町にも子供たちや市民、観光客にこんなすばらしい贈物はできないだろうか。将来をになう子供たちがこれらの彫刻を通じて芸術に目を開き、世界に向ってはばたくことができたらと思う。幸い、大町にも高瀬川などにすばらしい原石が数多く眠っている。この原石に命を与えたなら、将来の大町にとってすばらしい文化財産になるのではないかと思う。

（大町市教育委員　砂田　繁雄）

爺ケ岳冷尾根

大町山の会

一九八二・十二月三十日～
一九八三・一月三日

大町山の会　榛葉、浅川、西田

十二月三十日大町山の会事務所を午前六時三十分に出発、大谷原へと向かう。

二年続きの雪不足で低い山の斜面は雑木が黒い樹をのぞかせている。やはり正月が近いのか大谷原には数パーティーが入山の準備をしている。

今回の山行の山域を決めるにあたり私達は一つの目標を立てる。それはテントを使用せず雪洞とツェルトで、冷尾根（大谷原～冷尾根～爺ケ岳北峰距離四千メートル）を征服しよう、「二日かかっても三日かかってもいいから精一杯やろう」という目標をもって取り組んできた。

春の頃よりトレーニングを続けてきた成果を少しでもこの尾根にかけようと、雪少ない冷尾根を見上げながら大谷原を七時出発する。

西俣に続く広い道路を十五分ほど歩いて行くと左手に吊り橋がありいよいよ冷尾根末端に取り付く。雪が少ないので苦しい登りとなり、低木が顔を出していて本当に歩きずらい。特に春雪解けとともに可憐な薄紅色の花を咲かせるシャクナゲほど、邪魔になる木はない。大谷原の西の丸山（一三七六）はまだまだ見上げる位置なので標高はまだ低い。汗は溢れる様に体を流れて行く。ザックにくくり付けたピッケルやスコップが木に引掛り、気がむしゃくしゃしてくる。やっとの思いで標高一六六三の小さなピークに立つ。時計はもう十二時を指している。

ここでしばらく休み行動食をとる。ガソリンの補給だ。これより標高一九七一までは地図の等高線も混んで計画時よりだいぶ急な斜面であろうと予想してはいたものの、へんな予想というのは当たるもので、ラッセルと木登りのミックスした苦しい登りだ。枝にしがみつく、ドサッと枝に積った雪が頭をおおってしまう。ここが一番苦しい時と歯を食いしばりながら、ジリジリと高度を稼ぐ。

午後三時三十分、標高一九七一のピークの下一八〇〇メートル地点に岩のテラスがありここでビバークすることにする。休むことなくツェルトを張りコンロでお茶を沸かして飲む。この一瞬が言葉ではいい表せないほど、ほっとするひとときである。

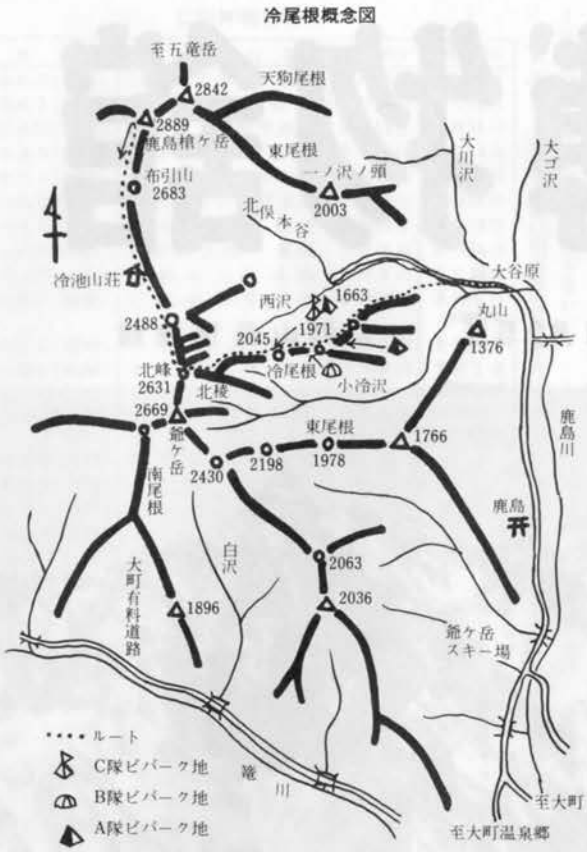
四時の気象通報を聞きながら天気図を作成して、明日の天気を予想する。中国大陸には冷たい風をつれた高気圧があり、また日本の東には低気圧があって、冬型の気圧配置となっているが等圧線も混んではいないので明日も大丈夫、行動できると判断した。夕食をとり午後七時爺ケ岳北峰に出ることを思いながら、眠る。

十二月三十一日、午前四時に起床。風が強いようだ。降雪も少しあったようで朝食をとり七時三十分出発。テラスから五メートルの岩場はザイルを張って突破する。今日も一日中やぶこぎで終わるのだろうかという不安を頭のすみに置きながら出発する。この辺りになると雪も多くなり腰くらいになる。ワカンジキを履いていよいよ本格的なラッセルになる。ラッセルは本当に苦しく両手で雪をかき分けて、ジワジワとルートを伸ばして行く。時にはワカンジキを付けての木登りともなる。三人がローテーションを組み二、三十メートルくらいトップを行っては交替するというパターンが続く。

ついに十二時三十分一九七一のピークに出た。太陽はギラギラと輝きまるで五月のようだ。ピークの平担な所にどこかのパーティーのテントがある。彼らはノーマルルートを登ってきたのだろうか。ここから先は人の歩いた跡があり、もう苦しいラッセルは終わるかにみえた。

ラッセルをしないということは本当に楽である。自分の目でルートを描きながら雪をかき分けてルートを切り開いて行くということがどんなに苦しいことか、経験の浅い私にとって骨身にしみた。

次のピーク二〇四五まで緩やかな登りとなる。午後一時三十分陽は高いがこれ以上ルートを伸ばしても適当なビバーク地がないと判断して二〇四五手前で、雪洞を掘ってビバークすることになる。約一時間で三人が入れる



灌木帯をラッセルして進む

雪洞が完成し体を休める。天気図を取って見るが明日も良さそうだ。大町の夜景が美しい。午後七時、バリバリに凍った冷たいシュラフに身を放り込む。

一九八三・一月一日、夜半より吹雪いており、風はだいぶ強そうだ。朝食をとり七時三十分出発する。先行している紫岳会パーティーとラッセルを交替しながら冷尾根上部の高度をかせぐ。

今日大谷原を出発した我会B隊とのトランシーバー交信時間が近いので開局する。ローソク岩にて交信する。B隊は我々が二日かかったルートを一日でこなしているようすである。

冷尾根は上部で北稜にぶつかり消えている。この少し手前で紫岳会パーティーと別れる。彼らは奥ノ稜を登はんするということである。私達は北稜にトラバースする手前でハーネスを身に付けて準備をする。

ザイルを出して四十メートル左へトラバースして北稜を見下ろすと、雪稜がノコギリの歯の様に切り立っているすごいリッヂである。ここからもう一ピッチザイルをフィックスする。ハイマツの上に雪が積っていて思うように登れない。三ケ所ほどランニングビレーをとり、立木にザイルを固定する。

稜線はまだ見えない。ここで少し行動食をとり、もうひと頑張りと動きの悪い体をどなりつけながら雪稜を登る。午後二時十五分ついた鈴ケ岳北峰に出ることができた。本当に嬉しかった。風も強いので長居はせず冷山荘へと向かう。稜線は、雪がしっかりと踏み固められてまるで一級国道である。冷山荘の囲りは色とりどりのテントで、さながらテントのアパートの様だ。冬期小屋で濡れたシュラーフを乾かしながら、明日は鹿島槍ケ岳の頂を踏むことを考える。

北稜ＪＰ直下雪壁を登る

B隊と交信し、明日午前七時三十分に交信するということで、行動予定を確認して、閉局する。富山県側からの風は強く明日の天気が気になる。七時シュラーフに身をくるむ。

一月二日、午前七時三十分に冷山荘出発、鹿島槍ケ岳南峰に向かう。トランシーバーの定時交信を交わし、三時間後に鈴ケ岳北峰にてジョイントする予定にする。八時四十分、鹿島槍ケ岳南峰に到着。頂上は風が強く、テルモスの紅茶を飲み下降する。荒沢北稜から鹿島北峰を抜けてくるC隊とはジョイントできなかった。

冷山荘にて、パッキングをして、B隊とジョイントすべく鈴ケ岳北峰に向かう。しばらく歩いて、北峰を見上げると、三人くらいの人が見える。「きっとB隊であろう」。

午前十一時四十分鈴ケ岳北峰にてB隊とジョイントすることができた。ここでしばらく休み再び冷尾根を下降する。途中北稜にて一ピッチ、北稜から冷尾根トラバース、下降に二ピッチ、冷尾根ローソク岩下の斜面に一ピッチと、ザイルを合計四ピッチ、フィックスして、安全に下降する。

午後一時三十分、B隊のベースキャンプに到着し休むことなく整地してツェルトを張る。凍ったシュラーフ、衣類などザックの中に入っている全てのものを、木に吊るして乾かす。時を同じく、C隊は冷尾根を下降し、北稜取付き点にて、ビバークするということをB隊、チーフリーダーより聞き、A隊の榛葉はC隊ビバーク地に向かう。

明日、天気が良ければ北稜をアタックすることができる。C隊のビバーク地で、狭い軽テントに、三人がうなされるようなぎゅうぎゅう詰めの中で眠りにつく。

天気図によれば天気は崩れるという予報である。

一月三日、午前二時起床。外のようすをうかがう。風が強く吹雪いている。

午前五時B隊ベースキャンプとトランシーバーの交信をし、北稜アタック中止を決定する。外が明るくなると、撤収しB隊のベースキャプへと向かう。

午前九時三十分ノーマルルートを下降。途中で再び紫岳会パーティーと会う。彼らは奥ノ稜を完登したとのことである。

下降も雑木が顔を出していてまったく歩きずらい。やっとの思いで小冷沢に下る。

ここからは沢通しに下ると大谷原に出る。

今回の合宿も終わりを告げた。

五日間の合宿を反省してみると数々の点が浮かぶ。まず、テントを持たずにツェルトか雪洞でビバークすると言いながら、安易に小屋を利用してしまったこと。小屋の囲りにも雪洞を掘ることのできる場所がありながら小屋に入ってしまったことを深く反省しなければならない。また装備においても一部不充分であったことなどがあげられる。

私にとっては厳冬期初めてのリーダーの経験であり、本当に苦しいラッセルを知り、これからの山行にプラスになると思う。

一九八三年は、ゲレンデに通うばかりでなく、実戦的なくり返し、平地でのトレーニングを続け、自分の目標に向かって、一歩一歩進みたいと思う。

なお一月三日午後、紫岳会パーティーと、我会の事務所で、フリートーキングをしながら懇親会を会催し、有意議なひと時を送った。

（記榛葉伸男）

A隊　CL榛葉、SL浅川、西田
B隊　CL松原SL宮田、千々岩、柳沢（史夫）
C隊　CL降旗、SL柳沢（昭夫）

行動記録（B隊）

一九八二、十二月三十日
6時30分事務所——7時40分大谷原——7時15分取入口——支尾根12時取り付き——15時30分ビバーク（標高約一八〇〇）

十二月三十一日
7時30分ビバーク地——12時30分標高一九七一PK——ビバーク13時30分（標高二〇三〇）

一九八三、一月一日
7時30分ビバーク地——14時15分鈴ケ岳北峰——14時45分冷小屋

一月二日
7時30分冷小屋——8時40分鹿島槍ケ岳南峰（二八九〇）——9時30分冷小屋——11時40分鈴ケ岳北峰——13時30分冷尾根（B隊ベースキャンプ）

一月三日
9時30分冷尾根（B隊ベースキャンプ）——12時小冷沢——10時30分大谷原——11時大谷原——大町山の会事務所

鹿島槍頂上より鈴ケ岳方面

仁科神明宮の棟札（重要文化財）

上条為人

仁科神明宮本殿（国宝）は、わが国で最も古い神明造りの原初形態を残しており、伊勢神宮にならった二十一年目毎の式年遷宮を、創始以来忠実に続けてきている。これを具体的に実証するものが棟札である。

棟札というのは、建物建築の際にその年月日・建造の当事者・大工・費用等を板に書いて棟木に打ちつけたものである。仁科神明宮には、南北朝時代の永和二年（一三七六）から昭和五十四年まで、六百年以上にわたる総計三十三枚の棟札が残されている。その中で江戸時代までの二十七枚が重要文化財に指定されているが、このように整然と年次を追っている多数の棟札が、残され文書として指定されていることは全国に類がない。

棟札の大きさは寛永以前はほぼ長さ九十センチ前後、巾二十センチ前後、厚さ二センチ前後の桧板で、それ以後のものは大小まちまちであり、書式も異っている。

元和以前における棟札の書式は、おおむね表面の中央に天照皇大神宮御宝殿奉造替年月日と大きく書かれ、その右側には造営奉仕者の官名・法名・通称・児女等が書かれ、左側には杣山入初・手斧初・借殿遷・柱立・棟上・御遷宮の日時が記され、中央下部には奉行人・大工・小工・釘奉行・桧皮葺・銅細工・鍛冶・轆轤師などの名をつらねている。

裏面には作料事として、大宮の手斧初・柱立・棟上・棟瓦置・御遷宮・桧皮葺・桧皮切初・銅細工・鉄細工・御門屋の手斧初・柱立・棟上祝・廊の作料など、造替と遷宮に至るまでの工事費や祭式に要した祝料や酒肴料などが詳細に記録されている。

このように永和二年以来、棟札の大きさや記載形式が整っており、各面で伊勢神宮の伝統が忠実に守られていることから推して、式年造替は棟札の存在する以前、恐らく仁科神明宮創始以来から継続しておこなわれていたにちがいない。

とにかくこの棟札は仁科神明宮の式年造営、特に元和以前の造替状況を知る唯一の貴重な資料である。

この棟札を通して知り得る重要なことは、伊勢神宮の式年遷宮が内宮外宮とも、戦国争乱期の百二十数年間中絶せざるを得なかった時にも、一回も欠かさず行われてきたことである。また二十一年目毎の造替が宮大工によって前例通りおこなわれ、寛政以後は修覆に止ったものの、こうした事が古い原初形態をそのまゝ後世に残すゆえんになっているのである。

造営奉仕者は、平姓を名のり「盛」の通字を用いた歴代仁科氏の当主があたり、仁科氏滅亡後は松本藩主に引き継がれ、更に明治初年に二、三年の遅れはあったものの氏子に引きつがれて今日に及んでいる。またこの棟札によって歴代仁科氏の当主や、造営を指揮した重要な家臣団であった奉行人、直接造営に当った宮大工及び職人たちの状況や、それ等のうつりかわり、伐木から遷宮に至る祭儀の順序や期日を知ることができる。

特に、杣山（造営に必要な材木を伐採する御料林）に入る日時は異なっていても、最も重大な祭儀であった御遷宮の日時は、奉仕者の止むを得ない絶対的な事情があった年次を除いて、六月十四日におこなわれている。これは、古来から仁科神明宮の例祭が六月十六日に行なわれてきたことにもとづくからであった。こうして例祭は明治維新後まで六月十六日におこなわれ、引き続き六月十七日には大町の若一王子神社でおこなわれてきたのである。

なお、造替に要した作料や祭儀の祝料・酒肴料の推移を具体的に知ることができる。

このように棟札は資料として重要であるばかりでなく、歴代仁科氏の財力や精神的支柱としての厚い信仰心を如実にうかがうことができる貴重な文化遺産である。

（大町市史談会々長）

棟札（裏面）

仁科神明宮棟札

年号	造営奉仕者	杣山入初月日	御遷宮月日
永和2（1376）	仁科彈正少弼平盛国	2月16日	6月14日
応永3（1396）	仁科孫三郎盛房	2月27日	6月14日
応永23（1416）	仁科彈正少弼平盛房	2月13日	6月14日
永享8（1436）	仁科孫三郎平持盛	3月24日	6月14日
康正2（1456）	仁科彈正少弼平持盛	2月21日	6月14日
文明8（1476）	仁科彈正少弼平盛直	2月21日	6月14日
明応5（1496）	仁科孫三郎平明盛	2月21日	6月14日
永正13（1516）	仁科孫三郎平盛国	2月9日	6月14日
天文5（1536）	仁科孫三郎盛能	2月9日	6月14日
弘治2（1556）	仁科修理亮盛康	2月21日	8月1日（矢神役不調）
天正4（1576）	仁科五郎盛信	2月9日	6月14日
文禄5（1596）	石川玄蕃守三長	2月9日	7月1日（建物神役不調）
元和2（1616）	小笠原左近大夫源忠政（3枚）	2月吉日	12月16日（筑摩郡仕置兼帰付）
寛永8（1636）	源朝臣松平直政		
明暦2（1656）	水野忠職		
延宝4（1676）	水野忠直		
元禄9（1696）	水野忠直		
享保元（1716）	水野忠周		
元文元（1736）	松平丹波守光碓（戸田）		
宝暦6（1756）	戸田光碓		
安永5（1776）	戸田光梯		
寛政8（1796）	戸田光行		
文化13（1816）	戸田光年		
天保7（1836）	戸田光年		
安政3（1856）	戸田光則		
以上27枚　重要文化財			
明治11（1878）	明治32（1899）		
大正8（1919）	昭和11（1936）		
昭和34（1959）	昭和54（1979）		

山と博物館　第28巻　第1号
一九八三年一月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL②〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）